

反骨の教育家 評伝 長崎太郎 Ⅲ

A Critical Biography of NAGASAKI Taro (Part Ⅲ)

関 口 安 義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

卒業記念旅行

一高の卒業を前にして、長崎太郎は進路をいかにすべきかで悩んでいた。それは親しい友の井川恭とて同様であった。井川恭は一高在学中から、否、入学以前からと言い直した方がいいのだが、小説や詩や短歌や俳句を盛んに書いていた。入学前に書いた「海の花」という小説は、『都新聞』の懸賞一等作であり、一九〇八(明治四二)年七月十六日から八月二十四日まで四十回にわたって同紙一面に連載され、彼はそれによって三五〇円という当時としては大金を得ている。自然主義の影響を受けたこの小説の梗概や作風に關しては、小著『恒藤恭とその時代』(日本エディタースクール出版部、二〇〇二・五)にくわしく紹介しているので、参照していただきたい。井川恭は一高に入っても、創作を続けている。学費を得るためであった。その主な寄稿先は『中学世界』と『教育学術界』であり、

内容は少年小説である。学校や仲間知られるとまずいので、井川恭は鈴かけ次郎のペンネームを用いた。『中学世界』発表の少年小説には、「さらば中学時代よ!!!」(一九一三・五・六)、「夏のファンタジア」(一九一三・八・九)などがあり、『教育学術界』には、「跳る波」(一九二二・四・五)、「二先生」(一九二二・九)、「上京」(一九二三・九・二二)などを載せている。文章は巧みで、素人の域を超えている。井川恭は、セミプロの作家だったのである。

が、一高に入学し、芥川龍之介や久米正雄に接した彼は、自己の文学的資質への疑問を感じはじめた。井川恭は筆を執っては、誰にも負けない自信があったものの、それが新しい時代を切り開くものでないことを、うすうす自覚しはじめたのである。芥川龍之介は「あの頃の自分の事」(『中央公論』一九一九・二)で、『白樺』の武者小路実篤評価に關して、「我々は大抵、武者小路氏が文壇の天窓

を開け放つて、爽さわやかな空気を入れた事を愉快に感じてゐるものだつた。恐らくこの愉快は、氏の踵くびすに接して来た我々の時代の青年のみが、特に痛感した心もちだらう。だから我々以前と我々以後とは、文壇及びそれ以外の鑑賞家の氏に対する評価の大小に、径庭があつたのは已むを得ない」と書いた。これはこんにちの時点でも、文学史上正当な評価であることは言うまでもない。

ここで芥川アカタの言う「我々の時代の青年」に、井川恭は属してゐなかつた。彼は自然主義文学に、親しみ過ぎていたのである。田山花袋に関しては、小説のみか紀行文までが愛読書であつた。ちなみに井川が療養生活中に盛んに投稿し、入選した『ハガキ文学』の小説欄の選者は、田山花袋であつた。

要するに井川恭は、早く来てしまつた青年であつた。彼と同じ年齢でも、菊池寛は違つていた。菊池は東京高等師範学校に入つたものの、そこを追放され、明治や早稲田での学校ルンペン時代が長く、一時は文学どころではなかつたのである。そのため当時の日本の文壇の主流であつた自然主義文学も顧みる暇もなく、自然主義の影響を受けることもなかつた。菊池寛は後年、自然主義に無縁であつたことは、非常によかつたと回想する。「私は、自然主義に親しまなかつたために、その次の文壇に顔を出し得る要素を蓄積することが出来たやうに思ふのである」(『半自叙伝』)と書くことになる。人は才能だけで成功するものではない。時が大きく作用するのである。

さて、進路の悩みは、井川恭だけではなかつた。文科に籍を置いたものの、法科への進学を希望する者が、一高の英文科のクラスには意外と多かつた。その事例は、次章で触れることにしている。法科は文科より就職に有利だったのである。井川恭もそして長崎太郎

も、このころから進路をどうすべきかに悩みはじめていた。結局、井川恭と長崎太郎は、法科に進学することになる。長崎太郎は、この頃芥川龍之介の皮肉に満ちたことばに傷つけられたことを日記に書いてゐる。一九一三(大正二)年五月十三日の記事に、以下のような文章を見出す。

自分は芥君アカタから云はれた言葉を思ひ出して何となく残念な様な気がする。自分の黒板へ石田君の真似をして書いた中華と云ふ文字が石田君のに似て居たのを、芥君は字は性質を頭はす君の性質と石田君の性質とは似て居る所が多いと。自分は芥君がはたしてどんな意味で此の言を發したかを知らぬ。然し自分は今まで受けたことのない侮辱を感じた。芥君は石田君の性質を口を極めて罵るが常だ。其の石田君に自分が似て居ると云ふのか。よいよい、云ふ人をして曰はしめよ。唯神知り給ふ。然し芥君から自分は二度目の侮辱を今日受けた事は、嗚呼よいよい、黙して居やう。唯黙して居やう。やがて時が来る。正しい道を歩む者の勝利の時が来る。

はたして自分は石田君に似た所があるか？ 自分は自分で此の事を考へて見やう。まんざら無意味な事でもあるまい。

石田君とは後年東洋史の權威となつた石田幹之助である。一九九一(明治二四)年十二月二十八日、千葉県千葉県の生まれ。成瀬正一と同じ東京の私立麻布中学校の出身であつた。「成瀬日記」の一九一二(明治四五)年五月二十七日の寮生寸評には、「石田君一番喰へない人。私と同じ中学出身だ。アンマリしゃべるので駄弁と

云はれている。絵がうまい。氣をつけて交際すべき人だ」とある。級友にあまり評判のよくない石田幹之助に性質が似ていると芥川に言われ、長崎太郎は〈侮辱〉を受けたという。若き芥川のやや軽率な物言いに長崎太郎は、いたく傷ついたのである。

こうした面では井川恭は、大人であった。彼はめつたに人の悪口を言わなかった。日記（『向陵記』）にさえ書かなかった。一室十二名を収容する狭い寮空間では、日記はしばしば盗み読みされた。そうしたこともあつてか、注意が必要であつたのかも知れない。それにしても、井川はできた人間であつた。ちなみに「成瀬日記」の井川評は、「級の総代として最もよい人」である。これは多くの級友の考えでもあつたろう。菊池寛は後年「半自叙伝」（『文藝春秋』一九二八・五—一九二九・二）で、井川恭を評し、「少し若老と云ふ氣がしたが、温厚の長者の風があつた」と書いている。

長崎太郎はこのような友、井川恭を慕つた。それは純愛の同性愛のような感があつた。太郎は井川と、しばしば神について話し合つた。芥川に〈侮辱〉を受けたと日記に書いた二日後の五月十五日の「長崎日記」には次のような記録が見られる。

昨日愛する友井川君と登校の途中に神に帰るすなほなる心に就いて話す。自分に此の念が此の頃ようやく薄らいで居るのを感じず。——嗚呼友より此んなに早く此の言葉を聞かうとは全く予期して居なかつた。生ける神よ。愛の神よ。吾は只其の大きな御力を讚美し、驚嘆し、其の前に跪いて心より感謝の声を挙げよう。捧げよう。

井川の語つた〈言葉〉がどんなものであつたかは、記されていない。この頃太郎は、国木田独歩の『欺かざるの記』を読んでいる。

この年六月二日の夜、上野精養軒で卒業謝恩会が行われ、太郎は出席した。井川恭の「向陵記Ⅷ」によると、幹事役は井川恭と芥川龍之介であり、十六人の教師を招待している。その教師とは「新渡戸校長をはじめ、英語の村田、石川、畔柳の三教授、シーモア、クレメントの二講師、ドイツ語の速水、丸山の二教授、ウンケル講師、西洋史の齊藤教授、東洋史の箭内教授、漢文の塩谷、島田両教授、国文の今井教授、法学通論の棚橋講師、体操の米田講師」である。多くの学生を落第させ、原級止まりにする事例を多く作つた岩元禎の名は、どういふわけか見当たらない。敬遠されたのだろうか。否、そんなことは井川恭・芥川龍之介両秀才の前には無効である。たぶん都合がつかなかつたのであろう。

ところで、長崎太郎は一高を卒業する間際、三年間共に過ごした高等学校生活の名残りを惜しむための記念旅行を芥川龍之介・井川恭・藤岡蔵六の四人で行つてゐる。目的地は群馬県の赤城・榛名方面であつた。一九一三（大正二）年の六月のことである。卒業試験はこの年六月十二日にはじまり、二十日に終わつた。翌二十一日の午前、長崎太郎は井川恭・藤岡蔵六と連れ立って、新宿の芥川の家を訪れ、旅の打ち合わせをした。いろいろのことがあつたとはいへ、一高時代の太郎の親しい仲間、この三人であつた。

彼らは二十二日の早朝上野駅に集まり、出発する。途中足尾鉄道に乗り換え、一小駅上神梅で汽車を下り、徒歩で赤城山の中腹に着き、大沼の湖畔の宿に一泊した。次の日は、早朝、黒檜山に登り、頂上をきわめた後、下山して徒歩で前橋に出、そこからは電車で伊

香保の温泉へ行って泊まった。二十四日は榛名山に登っている。翌二十五日に芥川と藤岡は帰京したが、長崎と井川の二人は、さらに妙義山から軽井沢に回った。

恒藤恭の『旧友芥川龍之介』（朝日新聞社、一九四九八）に収録されている「赤城の山つつじ」（初出『松陽新報』一九二三・七・一六～一三）は、この時の旅の模様を記した紀行文である。藤岡蔵六もまた『父と子』（私家本、一九八一・九）に、「一高卒業記念旅行」として、この旅のことを書き残している。

芥川龍之介は前々年の春休みの頃、府立三中の友西川英次郎とまだ雪に埋もれた赤城に来たことがあり、赤城が一番好きだと言っていたが、この時も四人は赤城の素晴らしさに酔うのであった。恒藤恭の「赤城の山つつじ」には、山登り中の若き長崎太郎を描いた箇所がある。これも引用しよう。

最後に休んだ場所の水は殊に冷めたかった。疲れ切った長崎が急ぐやうにして抄すくつて呑んだあとでにつこり笑った顔を見てゐた芥川が、「もう一度笑つて御覧。ほんたうに今は無邪気な顔をしてうれしさうに笑つたね。かはらしい顔をしたよ。まだあんな無邪気な笑ひがほが出来るんだから頼もしいや。はは」とわらふと、「でもほんたうに嬉しかつたんだから」と長崎はほほゑんだ。

一高時代の長崎太郎は、晩熟おくての純な青年であった。芥川龍之介はこの卒業記念旅行の時、伊香保の宿で、

晩春のノスタルジアに潤へる友の眼のやはらかさかな

かかる子は恋にふさはず歌ひつつ旅を行くべかりける
と長崎を詠んで、名所絵はがきに書きつけている（全集未収録）。

四 進路の変更

京都大学法学部

一九一三（大正二）年七月一日、長崎太郎は第一高等学校第一部文科を卒業した。卒業成績は『官報』（第二七七号、一九一三・七・二）によると、二十六名中十位、入学時トップだったことを思うと、成績は目立たない。とはいえ、秀才連中の中で十位というのは、まずまずである。菊池寛の冤罪えんざいを晴らそうと、卒業試験の最中に瀬戸虎記校長の家を訪ね、夜明け方まで話し込んだりして、十分な勉強ができなかったことが、ヒトケタ内に入らなかった原因といえよう。

大学は京都帝国大学法科大学政治学科を選んだ。親友井川恭の影響である。すでに記したように、井川は卒業を前に文学を断念し、法科へ行くことを決めていた。井川は、創作には自信があった。しかし、一高で芥川と接し、その読書量や考え方において、自分よりもはや遅れていることを意識せずにはいられなかったのである。また、病氣療養中、神戸衛生院で出会った郡虎彦こおりが、その頃『白樺』や『スバル』や『三田文学』に、次々と小説や戯曲を発表、それを読むにつれても、自然主義にない新しさを感じさせられていた。

のちに恒藤姓となった井川は、いくつかの回想で芥川の名を出し、彼と交流したことで「自分は到底、文学を専門的に研究するだけの能力のないものだということを痛切に感じ」（『読書のおもい出』『現代随想全集27』収録、一九五五・三）で、方向を転じたとしている。と同

時に恒藤恭は、文学で生活できるのかの思いもあった。彼には父井川精一の着実な官吏生活が常に頭に浮かんでいた。同じことは長崎太郎にも、そして他の何人かの級友についても言えるのである。

長崎太郎は文学研究を志し、中学の教師になろうと文科を選んだ。が、一高のすぐれた仲間と接し、自身の限界を知らされ、将来の仕事を真剣に考えるようになった。彼は教師になるにしても、まずはより広い世界を知ろうと思うようになっていた。親友井川恭が京都帝国大学進学を最終的に決めた時、彼もそれにならったのは、ストレートの文科進学への不安があったのである。

当時一高の文科から法科に転科する者は、彼らの他にもかなりいた。もともと東京帝国大学法科大学では、文科からの学生を受け入れなかったで、彼らの多くは京都帝国大学を志望した。井川恭と長崎太郎のほかにも、小栗栖国道・菊池雪城・石戸正則・加藤正義らが京都帝国大学の法科を志望し、受け入れられた。この中で小栗栖国道は、後年京大教授となっている。当時、京都帝国大学法科大学は、法律学科と政治学科で成り立っていた。長崎太郎は井川恭とともに政治学科に所属した。小栗栖国道は法律学科を選んでいる。

京都に住むようになった長崎太郎は、まず聖護院山王の下宿に住んだ。が、間もなく吉田近衛の大学寄宿舎に移る。井川恭と一緒にある。寄宿舎入舎に際しては、当時京大の学生監をしていた山本良吉の面接を受けている。山本良吉は、のちに旧制武蔵高等学校校長となる倫理学者である。山本は一九〇八（明治四二）年から京大生監をつとめ、三高教授を兼任していた。

当時の法科大学の学長は、法理学を担当していた仁保亀松であった。二人は共に受講している。井川恭は仁保の講義を聴き、入念な

ノートを作成した。「法理学 仁保教授」と題したもので、原本は関西大学年史室にある。わたしはそのコピー版を大阪市立大学恒藤記念室で確認している。長崎太郎のノートは、今のところ発見されていない。寮生活は一高時代に勝つてにぎやかで、澁刺としていた。長崎は落ち着いた環境の古都京都が気に入った。大学は自由で、多くの期待の持てる場であった。

京都帝国大学に進学した長崎太郎が誰よりも親しく交わったのは、一高時代からの親友井川恭であり、その交流は生涯のものとなる。井川とは毎日のように会って話をし、休日には二人して比叡、鞍馬、愛宕、大文字などの山々に登ったり、法然院の付近から南禅寺のあたりまで、疎水の岸を歩いたりした。水彩画の好きな二人は、画板を担いで散策した。

この年十一月三十日付井川恭宛芥川書簡の一節に、「長崎君なんかによく、尤も面倒だつたらよろしく云はなくてもいい、京都にある人は君以外に思出す事は殆どない」とある。当時京都帝国大学には文科の選科にいた菊池寛のほか、法科には井川・長崎、それに前述のように小栗栖国道・菊池雪城・加藤正義らがいたが、芥川には何といつても井川が懐かしかったのである。一高時代「二人は」飯を食ふにも、散歩をするにも、のべつ幕なしに議論をしたり。しかも議論の問題となるものは、純粹思惟とか、西田幾多郎とか、自由意思とか、ヘルグソンとか、むづかしい事ばかりに限りしを記憶す」（『氣鋭の人新進の人』『改造』一九三・一〇）と後年回想するように、芥川には京都に去った井川が懐かしかった。それだけに井川と仲よく同じ寄宿舎にいる長崎太郎のことが気になったのであろう。

一高を卒業する頃に、長崎太郎は社会問題に興味をもつように

なっていた。進学した京都帝国大学は、時の権力に追従しない自由な学風を築いていた。それが長崎には心地よく感じられたのである。京都帝国大学には、京大基督教青年会があり、太郎は一時、その地塩寮に入ったこともあったが、キリスト教からは、次第に心が遠のいていった。それでも夏安芸町に帰省した折には、中学時代の友人須賀寛郎と森派の創始者森勝四郎牧師を訪ねている。すでに記したように、当時日本基督教会安芸教会は分裂しており、森は一九二二（明治四五）年一月に安芸基督教講義所（のちのイエス・キリストの教会）を開き、牧会伝道に励んでいた。

一高時代井川恭と激しく信仰問題をさまたげに論じ合って以来、長崎太郎は信仰に自信が持てなくなっていたのである。特に奇蹟が信じられなくなっていた。須賀寛郎に誘われ、安芸基督教講義所を訪れた長崎に森勝四郎は、「聖書は事実を書いたものではない。然し、信じて之を^{これ}読む者には一字一句悉く真理である事がわかる」と論じたという。これは長崎がいくつかの文章で重複して書いているから、この訪問は彼にとつてかなり重大なものであったにちがいない。後年の『宣教者森勝四郎先生とその書簡』（私家版、一九六・九）というユニークな一書は、こうした背景があつて生まれたのである。

長崎らの入学した一九一三（大正二）年の京都帝国大学は、大学の自治の問題をめぐって揺れていた。いわゆる〈京大沢柳事件〉である。これは教授の任命権をめぐる抗争事件であり、総長沢柳政太郎が教授会の同意なしに七教授を罷免したことから生じた。事件は年を越した一九一四（大正三）年一月、総長と教授会との交渉が決裂するという最悪の事態を迎える。「長崎日記」は、事件の推移をも記録している。この年一月十五日には「総長と教授との間に起つ

た大学自治問題は、終に破裂して教授の総辞職と云ふ事になった（中略）。午後三時から第四教室で学生大会が開かれた。五時まで学生は種々討議した上で、委員を挙げて法科大学教授の留任運動に従はしむる事に一致した」とあり、また同月二十日には「三時過ぎから法科の第一教室で第三回学生大会があつた。そして終に学生は諸教授と進退をとにもする事に満場一致を以て一決した」とある。

事件は時の文相奥田義人が教授団の主張を認め、沢柳が辞任することと決着する。後年長崎は、この事件を次のように回想している。

私は大正二年に京大に入学したが、あたかもその年に沢柳事件が起つた。京大総長として来任した沢柳博士は、就任早々、独断で文学部とその他の学部の一七教授に迫つて辞表を提出させ、それを免官とした。一人の免官者をも出さなかつた法学部の教授たちは、奮然起つて「教授の任免はあらかじめ教授会の同意を得るを要す」との主張のもとに沢柳総長と対立し、総長もまたこれと堂々と戦つた。法学部教授一同はついに辞表を提出し、学生のなかにも教授に味方して起つ者があつた。佐々木先生（注、佐々木惣一）は、海外留学から帰つて大正二年二月教授となられたばかりであつたが、辞職後は約束通り借金の返済が出来なくなることをあらかじめ貸主にことわつて起たれた。しかも先生は、真理と学問のために最後まで執拗に戦われた。時の文部大臣は先生と同郷の鳥取県出身の奥田義人氏であつたから、先生が大臣と強硬に交渉せられたことは想像に難くない。教授側の主張はついに文部大臣によつて認められ、教授の罷免は当該学部教授会の同意を経なければならぬこととな

り、敗れた総長は京大を去った。これは、ひとり京大全学の問題であるばかりでなく、実に日本の全大学の問題であった。

〔佐々木惣一先生と私〕私家本、一九七〇・六

長崎太郎にとって入学早々のこの事件は、大きな意味をもつ。いわゆる大学自治の問題が、そこにあったからである。のちの京大学生主事時代の瀧川事件（京大事件）も、そして自らの進退にかかわった京都美術大学事件も、この沢柳事件を経験したがゆえに彼は粘り得たのである。長崎太郎の教育家としての反骨、いごっそうに徹した背景には、若き日の沢柳事件が深くかわつていたとしてよいであらう。

ところで、太郎の友人恒藤恭にも、この事件にふれた回想文がある。これも参考までに以下に掲げることしよう。事件の大きな影響がしのばれる。

さうした朗かな、のんびりした学生生活に、突如として大きい脅威を投げかけたのは、私たちの入学した年の末ごろから、翌年のはじめにかけて起つた彼の「沢柳事件」であつたが、いはば夏の日の烈しい雷雨のやうに、それがひとたび過ぎ去つた後には、晴天の碧りの色の更に輝かしいのを仰ぎ見る思ひがあつた。その事件の最中に、十幾人の学生の中に加はつて総長官舎をおとづれ、沢柳さんの談話を肅然として傾聴したこともあつた。それから沢柳さんの後任として来られた山川さんの凛とした古武士のやうな風貌を初めて大講堂の壇上に仰ぎ見たとき、なんだか如何にもたのもしげに感じたことなどを想ひ起す。

〔大正の初めのころ〕『復活祭のころ』朝日新聞社、一九四八・五

右の文章の「山川さん」とは、長崎が後年生涯の三恩人の一人にあげる山川健次郎である。山川健次郎は一八五四（安政元）年七月十七日、旧会津藩士の家に生まれ、藩校日新館に学び、維新後、北海道開拓使の推薦で、ロシア次いでアメリカに留学、エール大学を卒業した。一八七五（明治八）年帰国、翌年東京開成学校教授補、一九七九（明治一二）年東京帝国大学教授となり、物理学を担当した。一九〇一（明治三四）年東大総長となり、以後九州帝国大学、京都帝国大学総長を歴任し、日本の大学教育の確立に尽力した人である。長崎太郎が山川に最初出会つたのは、京大時代、山川が一九一四（大正三）年春、総長として京大に迎えられた時であつた。のち長崎は武蔵高等学校教授時代に、校長としての山川とともに草創期の武蔵高校の教育に情熱を注ぐこととなる。

佐々木惣一

長崎太郎や井川恭や小栗栖国道らが、一高から入学した京都帝国大学法科大学は、発展途上にあつた。『京都大学七十年史』（京都大学創立70周年記念事業後援会、一九六七・一二）によると、教授陣は年を追つて充実し、「東大出の若手に対し、佐々木惣一が明治三七（一九〇四）年に助教授、大正二（一九一三）年に教授に昇任したのを始めとして京大出身者が次第に加わり、清新なる学風を醸成していった」という。創設以来十数年、権威に屈せぬ進取の精神に満ちた学園が、ここに育ちつつあつたのだ。

教授会の中核となる佐々木惣一は、一八七八（明治一二）年三月

二十八日、鳥取市西町七〇（現、西町一〇二）に生まれた。鳥取一中、金沢の第四高等学校を経て、一九〇三（明治三六）年京都帝国大学法科大学を卒業した。卒業と同時に講師となり、一九〇六（明治三九）年助教授、一九〇九（明治四二）年より三年間ヨーロッパに留学し、一九一三（大正二）年帰国後行政法担当教授となった。彼は京大法科の第一期生で、ドイツ語の力は抜群、学生時代から目立った存在であったという。佐々木惣一は行政法のほか、憲法やドイツ書講読なども担当した。

京大時代の長崎太郎や井川恭が、もつとも引きつけられた教授は、この佐々木惣一であった。入学して間もない頃、太郎や恭は帰国したばかりの新進気鋭の佐々木の講演を学生集会所で聴き、その魅力にとらわれてしまう。その行政法の授業は、熱心で魅力的な内容であった。彼は学問にすぐれるばかりか、人間的魅力に満ちていた。長崎太郎は井川恭とともに沢柳事件の折りには、佐々木惣一の泉川町の自宅を訪問、事件に関する佐々木の考えを聞き出している。

「長崎日記」の一九一四（大正三）年一月二十一日の記事に、「朝から井川君と佐々木教授の宅を訪ふて法科大学の問題に関する教授の御話をうかゞふ事が出来た」とある。こうしたこともあって、二人は、佐々木惣一の虜となってしまう。否、長崎太郎や井川恭ばかりではない。後年京大法科の教授として活躍する田村徳治・瀧川幸辰・森口繁治・末川博らは、皆同様に佐々木の講義や人柄に魅せられたのであった。少壮教授佐々木惣一は、颯爽としていた。その弁舌はさわやかで、魅力に満ち溢れていた。

長崎太郎は後年『佐々木惣一先生と私』（私家版、一九七〇・六）で、「私は、先生に教育者としての背骨をいれていただき、今日あるを

えたのである。先生は私の恩師であり、慈父である」と書くに至る。長崎太郎と佐々木惣一の生涯にわたる師弟関係が、ここに生まれる。後年長崎太郎が京大学生主事になるのも、京都市立美術大学の初代学長になるのも、佐々木の強い推薦あつてのことなのである。

右の『佐々木惣一先生と私』からは、今後もしばしばやつかいになると思われるので、ここで本書のことについてふれておこう。本書はB6判四七八ページ、口絵に四ページの写真を含む。装幀は日本画の小野竹斎である。内容は教育者となった長崎太郎の後半生が、佐々木惣一とのかかわりでくわしく回顧されるのである。

目次によって章立てを見ると、「京都」「高岡」「山口」「ふたたび京都」「安芸——書き終つて」となっている。この章立ては、佐々木惣一の強い要請で京都帝国大学学生主事（のち学生課長）に就任、やがて高岡高等商業学校長となり、次いで山口高等学校長に転出し、戦後佐々木惣一らの推薦で京都市立美術専門学校長として、再び京都に戻り、京都美術大学（現、京都芸術大学）の創設にあつたことが、多くの資料を駆使して描かれる。特に京都美術大学学長として大学教育に尽力したさまと、市当局の大学自治への干渉に、毅然とした態度で闘う姿が印象的な本である。ちなみに刊行年月日は、「昭和45年6月1日」となっている。発行者は太郎の長男長崎映吉である。太郎は「あとがき」まで書いていたが、刊行を見ることなく身罷っている。

本書の最終章「安芸——書き終つて」の一節に、「書き終つて私のなによりもおそれるのは、それ故、この稿によって先生の御徳を傷つけはしなかったかということである。／なお、長い年月の間の日本学生思想動乱の記録ともなったこの稿は、学生指導、大学管

理の問題のやかましい昨今、まずい糠ぬかのようなものかも知れないが、また、嚙かんでいたらあるいは米粒に嚙みあたることもあるかも知れないとも思うことである」とも記す。本書の初出稿は『高知アララギ』という短歌誌で、一九六五（昭和四〇）年十月から一九六九（昭和四四）年六月まで、四十七回にわたって連載された。「あとがき」には、「四十七回に及ぶ四年ごしの小文を毎号書き続けさせていただけたのは、同誌の編集者楠瀬兵五郎君の御好意によるところが多い」とある。

本書に描かれた佐々木惣一は、憲法学者・行政学者というよりも、人としての佐々木惣一の面が強い。長崎太郎は職場を変える際や難局にぶつかると、必ずといってよいほど佐々木の許に相談に行き、指導を求めている。後述するところだが、佐々木は一九三三（昭和八年）の京大滝川事件に際し、政府の弾圧に抗議して同僚とともに職を辞し、のち立命館大学総長となった。

井川恭（恒藤恭）との友情

京都帝国大学では、長崎太郎や井川恭らが入学した年の秋に、吉田近衛町に寄宿舎が新築された。太郎も恭も早速入舎した。恭の恒藤名で書かれたエッセイ「大正の初めの頃」（『京大新聞』一九三五・四・一六）には、「寄宿舎の建物が出来上つて、これから開舎されようといふときに、東京から京都に来て大学に入学することになったのでまだ何も彼も新しづくめの寄宿舎に入れてもらひ、その儘卒業の時まで其処でくらし」と回想されている。一人一室である。一高時代の一室十二名の詰め込み寮に比べると、天と地の相違であった。新築で木の香が漂い、明るい部屋は申し分ない環境で

あった。当時高等学校は別として、帝国大学に寄宿舎のあったのは、例外的ではなかったかと、後年恭は「寄宿舎生活をかへりみる」（『舎誌』京都帝国大学寄宿舎、一九三八・一二）に書き、総合大学の寄宿舎のよさに、学際的交流ができることをあげている。

大学に入り、同じ寄宿舎で寝起きするようになって、長崎太郎と井川恭の仲は、より深まる。二人は何かというと共に散歩し、将来を語り合うのであった。「長崎日記」にその交流の様子を見よう。「午後大学の北の方を通つて銀閣寺の方へ井川君と散歩した。いろいろ話した。今後の決心など語り合つた」（一九一四・一二二）、「昨日は午後は井川君と上加茂の社まで散歩した。消え残つた雪が社の芝生の上に美はしく見えた。比叡は青い空にはえて、壮麗な姿を帰り道に自分たちに見せつけた」（一九一四・一二四）、「井川君は自分にとりては真に得がたい友である。彼は自分にとりては何よりも貴い友である。彼によつて自分は如何にはげまされ、開られたか、自分は友として彼を得たるをよろこぶ。又自分に彼を与へた神に感謝しなくてはならぬ。自分は彼に出来るだけの真の心を以て対して、彼の友情に報ゆる処がなくてはならぬ」（一九一四・一二八）――。

こんな具合である。太郎にとつて井川恭は、あこがれの人であり、素晴らしき友人であった。一九一四年二月十八日の「長崎日記」には、「昨夜井川君が来られた。自分がかつて話したあのあはれな少女の話は、君の美しい筆によつて美しい物語と變つて居た。／いろいろ話した。信仰について、エスについて、現今の社会について。十時過ぎ井川君は歸られた」とある。「自分がかつて話したあのあはれな少女の話は、君の美しい筆によつて美しい物語と變つて居た」とある作品は、「お篠さん一家」という小説を指す。この年三月二十

日付で出る *Yantola* という名の寄宿舎誌に寄せたものである。おそらくはそのゲラ刷りを井川が太郎に見せたのだろう。

休日には長崎太郎と二人して比叡、鞍馬、愛后、大文字の山々に登ったり、法然院の付近から南禅寺のあたりまで疎水の岸を歩いたりした。絵は二人とも好きで、油絵の道具か水彩画の用意をして出かけるのが常であった。

京都大学の一年を終えた一九一四（大正三）年六月下旬、長崎太郎は郷里の土佐安芸町に、大学に入っていつそう親しくなった井川恭を誘って帰省する。恭の「土佐から」（初出『松陽新報』一九一四・七・二一・八六、のち『復活祭のころ』収録）という随筆が、かなりくわしくその事情を描いている。一高の自治寮以来一緒だった二人は、京都に来ても寄宿舎という同じ屋根の下に暮らしたので、井川はいつしか長崎の話を通し、土佐に関する知識を豊富にしていた。そして一度は行ってみようかという気になっていたのである。「土佐から」の冒頭部分を引用しよう。

六月の末、私はN君と共に京都を去つて、土佐の国へ来た。

N君は私の高等学校時代からの友人である。クラスも同じであつたし、あの懐かしい向ヶ丘の自治寮で起き臥しを共にしたこともある。京都に住むやうになつてからも、二人はやはり同じ屋根の下に暮してゐる。

N君は土佐の人である。自然私はN君の話を通して土佐の国に関する知識をよほど豊富にした。それで無かつたら土佐の国について私のもつて居る知識は鯉節の本場で自由民権論の生まれた土地と云ふくらゐの程度に止つてゐるのであつたかも知れ

ない。尤も漠然と土佐に対して一種の憧憬心ともいふべきものを以前からもつてゐたことは確かである。けれど、黒潮の流れる南の国といったやうなものを想像に糸がいて、時折り遊意に似たものを動かすに過ぎなかつた私をして、いよいよ土佐の国の土を踏ませるやうにしたのもN君である。

N君が長崎太郎であることは、言い添えるまでもなからう。恭は五条の彩料店に行き、油絵の道具と水彩画の絵の具とを一抱え買い込み、出発に備えた。二人は夜、神戸港から船に乗った。そこから室戸岬を経由し、高知港までは当時十五時間もかかった。高知から安芸までは約四十キロほどである。当時は後免までは電車が開通しており、その先は人力車に乗るのである。

二人はこのころ写生に熱中していた。彼らばかりではない。二人の一高時代の仲間も、皆絵に関心があつた。芥川龍之介は中学時代から絵が好きだつた。府立三中時代の水彩画「家」や「ちやば」のほか「女」と題された裸婦の絵のあることも知られている（恒藤恭『旧友芥川龍之介』九一ページ参照）。彼はまた、絵を添えたはがきや書簡をしばしば出している。長崎太郎や井川恭もその点では同様だ。ほかに久米正雄や松岡譲や石田幹之助も絵がすぎだつた。成瀬正一の絵画への打ち込みは、後年松方幸次郎の松方コレクション形成に大きな貢献をするまでになる（小著『評伝成瀬正一』日本エディタースクール出版部、一九九四・八参照）。

長崎太郎も後述するところだが、ニューヨーク滞在中美術館めぐりに日々を送るほどの絵画愛好家であつた。その芽生えは一高・京大時代に求められる。井川恭には赤城山や故郷松江の宍道湖を題材

とした水彩画やスケッチが知られている。長崎も井川も互いにはがきに水彩画を添えて出し合っている。井川は京大時代試験の間でもたびたび長崎を誘い、鹿ヶ谷や黒谷や白川のあたりへ写生に出かけている。井川の土佐行き目的の一つは、安芸の海を描くことにあった。なお、井川恭には、多くの水彩画が残されている。

井川恭の「土佐から」という文章は、高知から人力車に乗って安芸に行くまでのことが、くわしく書き込まれている。これは一種の紀行文である。早くから田山花袋の紀行文を好んで読んでいたこともあって、紀行文は井川恭の得意の分野である。安芸での恭は、長崎太郎とスケッチ箱をかついで、眺めのよいところを見つけては、写生に余念がなかった。二人は丘の中腹の長崎の親戚の別荘に、夜は泊まった。暑い夏であった。二人は安芸川の川口へ水浴びに行く。恭は水郷松江の育ちなので、泳ぎはうまかった。長崎も神伝流の許しをもらっているとかで、達者に泳いだ。井川恭は土佐に七月半ばまで滞在した。

八月二日、長崎太郎の母栄が亡くなった。死因は癌である。まだ四十七歳の若さであった。太郎は病氣を知って、すぐ母を京都の大学病院で手術をさせた。幽門部にできた癌は、摘出し得ないほど進行しており、やむを得ず胃と腸とをつなぎあわせて食べ物を通すようにしたという。一時全快したと思ひ込んでいた母を背負って、太郎は母の望む銀閣寺見物に連れて行った。「お前達の成長が私の唯一の望である」とかねがね語っていた母の死は、長崎太郎の大学時代の大きな事件であった。

同じ年の夏、ヨーロッパでは第一次世界大戦が勃発していた。同じ頃、かつて一高で同窓だった芥川龍之介や久米正雄・松岡譲

らは『新思潮』という同人雑誌を出していた。その九月号の巻末 *Spreading the News* に、彼らのヨーロッパの戦争への反応を見ることができ、対岸の火事という印象である。長崎や井川は、この時期熱心に社会主義の文献を読んでいた。

二人の森先生

京大在学中の忘れられない思い出として、長崎太郎がしばしば書き留めているのは、森という姓を持つ二人の先生のことである。

中の一人は、森明^{あきら}牧師である。森明は初代文部大臣を務めた森有礼と岩倉具視の五女寛子の三男で、哲学者森有正の父親にあたる人である。生来病弱のため、学校に通えず、岩元禎（一高教授）の家庭教師を受ける程度で、独学で通す。一九〇三（明治三六）年、十五歳の時、宣教師ミューラー夫婦の導きでキリストを信じ、翌年市ヶ谷教会牧師植村正久から母と共に受洗した。彼は熱烈な信仰に支えられ、東京神学社での聴講を長年断続しながらも続けて教師試験に合格、牧師となり、一九一四（大正三）年に、東京渋谷に日本基督教會講話所を開設した。伝記に清水二郎著『森明』（日本基督教出版局、一九七五・三）がある。

森明はキリスト教による人格の改造を訴えていた。長崎太郎が京大へ入学して間もないころ、森明は突然京都にやって来て、長崎を下鴨^{ひのき}の檜茶屋へと招いた。長崎太郎は京都に来てから教会に出席していなかった。そこで彼に教会出席の必要性を説くために、森明はやって来たのである。そこには後に西田幾多郎の長女彌生と結婚、法曹界で活躍する上田操（教育学者上田薫の父）もいた。

上田操は一八九〇（明治二三）年九月二日東京本郷の生まれ。長

崎太郎より二つ年上であった。学習院高等科を経て、一九一二（明治四五）年京都帝国大学法科大学に入学、学習院時代は白樺派の影響で、一時文学を志したこともあった。京大法科に在籍中、上田は内村鑑三の無教会主義に傾倒していた。森は教会に出席していない二人のために、わざわざ京都に來たのであった。

『森明著作集』（新教出版社、一九七〇・七）に添えられた「森明年譜」には、一九一四年の項に「秋、上田操・長崎太郎を京都に訪問（糺会の発端）」とある。長崎太郎は信仰に疑問を感じながらも、京大時代は、帰省すれば、日本基督教會安芸教會や森勝四郎の安芸基督教講義所に顔を出していた。これは「長崎日記」を見るとよくわかる。けれども日常的には教会に出席しなくなっていた。森明は教会から離れている上田と長崎のためにやって來たのである。長崎太郎に「わが友上田操君」という文章がある（『花のかげ上田三筆の画と文その追憶』黎明書房、一九六六・一二収録）。そこには以下のような記述を見ることができる。

先生（注、森明）は学習院の秀才学生であつた上田君の信仰の事を心配し、又、私が東京の教会を脱会して京都に來た事を誰かから聞いて、態々上洛して二人を逢わせ、二人を基督教に導き返そうとしたのであつた。

「教会にそむいて居る友人達を集めて下さい。私は皆さんの話をよく承わつて、話合つてみたい」最初は上田君と私の二人だけであつた集會に、学生の数が次第にふえた。若森久靖、金谷重義、小泉嘉章、金雨英君等がそれである。

私共の集會は、はじめそれが糺の森の檜茶屋で催されたこと

から、糺會と命名せられた。集る者は皆その所信、感想等を率直に述べあい、森先生は、それに対して先生の所見を述べ、先生自身の信仰を披瀝し、神学上からの批判を加えるなどして、盛んな討論が展開せられた事もあつたが、會は常に先生の熱禱を以てとじられた。

一年春秋の二回、先生は上洛してこの會を続けた。その結果、集まる者の信仰は次第に復活して、或は先生の熱心な導きによつて受洗を決意する者、或は再び教会に出席する者が出て來た。森先生が学生伝道に深い興味を感じたのは、この糺會にはじまつたのではなからうか。

松村克巳『森明と日本の神学』（弘文堂書房、一九四〇・九）は、森明の神学に光を当てたもの。松村は森明を高倉徳太郎と並べ、対比しながら高く評価する。森明は「日本に於ける教会」はいかにあるべきかを、植村正久より受け継ぎ考え抜いた人とされる。一時信仰を失つていた長崎太郎は、森明の指導で信仰を取り戻す。

いま一人の森先生は、すでにふれた安芸基督教講義所の牧師森勝四郎である。京大時代長崎太郎は帰省する度に日本基督教會安芸教會ばかりか、森勝四郎の安芸基督教講義所にも顔を出しており、森牧師の熱心な説教に魅せられていたのである。長崎太郎晩年の労作に『宣教者森勝四郎先生とその書簡』（私家版、一九六一・九）があることは、すでに記した。その前篇の「一 森勝四郎伝の資料」には、森勝四郎牧師の経歴の概要が記されていて参考になる。

右の本によると、森は一八七四（明治六）年三月、三重県鈴鹿郡庄野村（現、鈴鹿市）の生まれ。父は儒学者で天津で銀行を経営し

ていた。小学校を終えた勝四郎は、大津銀行の給仕をしたのち上京し、日本郵船に入社する。才気に溢れた彼は、たちまち出世する。内国航路事務長代理などを経て、欧州航路客船事務長を勤めていた時に、船客が置き忘れた一冊の英文聖書に出会う。拾いあげて読んだ彼は、キリスト教に目覚め、船が神戸に着くや否や最寄りの教会で洗礼を受け、信者になったという。

長崎太郎は森勝四郎が受洗した教会はどこか、また誰から洗礼を受けたかわからないしながらも、多分日本基督教教会（略称、日基）に所属する教会だったろうとする。三十余歳で出世の道を閉ざして、森勝四郎は日本郵船を退職、明治学院神学部に入學する。が、そこは森の旺盛な研究心を満たすものではなく、一年足らずで退學、一九〇三（明治三六）年アメリカのプリンストン大学神学部に留學する。彼はプリンストンで三年近くを過ごし、牧師となるための準備をする。

けれども、森勝四郎は伝道者として必要なのは、聖霊の導きのみと考え、名門プリンストン大学卒業の肩書きは必要とばかり、卒業寸前に退學してしまう。彼は無名の一宣教者として立つ決意を固めて帰国する。日本に戻った森勝四郎は、鈴鹿山中の湯ノ山で祈り、土佐伝道の啓示を受けたのだという。

『宣教者森勝四郎先生とその書簡』には、「説教は聖書によつて他を説かず」の章があり、「安芸町（今の安芸市）に住んで居た一老婆が、狂言を見るよりも面白かったと感嘆したと云う先生の説教には、聖書以外の事は、一言も述べられなかつた。有名な誰かれが、何と云い、何の本にこう書いてある、そんな話は絶対にしなかつた。先生は説教機に向えば、諄々として上より刻々に与えられる神の御心を述べて、ひたすらに聖書の真理を証した」とある。

森勝四郎は、すぐれた説教者だった。「聖書以外の事は、一言も述べられなかつた」というものの、単なる聖書研究ではなく、そこに聖霊が宿り、人を動かしたようだ。長崎太郎も森勝四郎の説教に、強く心動かされたのであった。この本で長崎太郎は、「先生には一冊の著書も論文も無い」と書いているように、森勝四郎の全容は文献として残るものが少ないだけに、その業績は描き難い。が、戦時下抵抗のシンボル、野中一魯男のような人物に、その精神は受け継がれていく。野中に関しては後章でとりあげる。

長崎太郎が京都大学の卒業試験の準備に励んでいたある日、森勝四郎牧師は京大の寄宿舎に突然訪れ、「人生の目的もわからず勉強して何になるか、すぐ退學して自分について来なさい」ときびしく諭したことがあった。長崎太郎の文章に直接聞こう。

「貴方は何の為に學問を勉強しておられるか。一生の目的も定まらず、信仰も確定せず、こんな処でぐずぐずしていることを止めて、直ちに私に従つて信仰の問題を解決なさい」

と、静かではあるが底力のある声で、真つ向に述べられた。私は、この時の森牧師の言葉ほど力強い言葉を未だ誰の口からも聞かない。それは真に忘れ難い言葉であった。中国人だったら『耳三日聾するばかりであった』とでも形容したであろう。

（両森先生）『平安』一九五二（二）

が、太郎は森のことばは心に留めたものの、その意見には従わなかつた。自分には自分の道があると彼は考えていたのである。願ひは教育の道であつた。

五 ニューヨーク時代

結婚と日本郵船入社

京都帝国大学法科大学最後の年、長崎太郎は結婚する。相手は大久保美和と言ひ、医師の娘で、県立高知高女出身の才媛であつた。太郎は一高時代から親友井川恭の妹との結婚を願つてゐた。井川の妹サダ（貞と表記されることが多かった）は、一八九四（明治二七）年三月十一日の生まれなので、太郎の二歳下に当たる。井川はこの妹を殊のほか可愛がつており、話のついでにしばしばその噂を太郎にも語つてゐたに違ひない。彼女は美形の聡明な少女であつた。

太郎は井川を尊敬するにつけ、その妹サダとの結婚を夢見てゐた。一高時代の日記「歩む」（「長崎日記」の一冊）の一節に、「自分はどうかして井川君の妹をもらひたい。然し若しそんな事を云ひだしたら井川君は何と云はれるだらう。僅かに気づいて居られるかもしれない。又自分の父や母は此れを許して下さるであらうか。それにしても自分の思つて居る人は、自分に対して多くのあきたらぬ思をするのかもしれない。馬鹿！ 馬鹿！ そんな空想をはたらかすのはもうやめよう」（一九一三・三・一六）とある。

長崎太郎はこの思いを長く心に秘めてゐた。京都帝国大学に入つて井川恭とますます親しくなつた時点で、太郎は井川に直接その気持ち伝えてゐる。が、井川はその時は、すぐには同意しなかつた。その理由を後に井川は太郎宛書簡（一九一七・八・一五付）にくわしく記している。それによると太郎の考えに「空想的な分子が沢山あるやうに思はれた」ことを第一にあげてゐる。「夢のやうな考へは、又夢のやうに崩れてしまひはすまいか」とは、太郎より四歳年上で

冷静な考えをもつ井川恭の当初の判断であつた。

当時、太郎には父文之助の勧める縁談が進行中であつた。そのことに對して井川は同日付の便りで、「君の一家、殊に君のお父さんに對して、僕がその際既に進行してゐた縁談を破るやうな事に、少しでも積極的に或る力を添える事は、僕の感情が許さなかつた。だから、この事は君の自由な意思で動いて貰おうと思つた。それに、君の一家、殊にお父さん達に反抗してまでも成り立たせたとする結婚が、どういふ苦しい立場に妹を置くかという事も、すぐ考へられた」と書いてゐる。

続けて井川は、いろいろの懸念はあるものの、「僕は君の申し出を採用して、それを妹や姉に相談してみようかと思つてゐる。その理由はたゞ、君は本当に妹を愛してくれるかも知れない、そして妹も幸福となるかも知れない、といふたゞ一事であつた」と書く。が、長崎は井川サダを断念し、父の勧めるままに、高知高女出身の医師の娘、大久保美和と婚約し、結婚した。後年一九六〇（昭和三五）年にNHK高知放送局から彼がラジオ放送した「妻とむすめと女中」の放送原稿には、彼女を「一度も見もしないで嫁にもらひました」とある。父文之助が前々から高知高女の教頭に斡旋を依頼してゐたらしく、選りに選つた人であつたという。

當時はこういうケースでの結婚は、しばしばあつたのである。彼の仲間では、成瀬正一がそうであつた。十五銀行頭取の息子であつた成瀬正一は、関西財閥の雄、川崎造船所の副社長の娘、成瀬福子とこれまた一度も会うことなく結婚してゐる。仲介者は双方の家の事情や当人の性格などをよく調べた上での紹介なので、このような結婚でも案外うまく行つたのである。

井川恭は長崎太郎の純情な性格を認めていた。それだけに太郎と妹サダとの結婚を考えないわけでもなかった。だが、事は思うようには進まなかった。井川は右の便りの一節に、「運命といふもの、不可抗的な力に思ひ到らざるを得ない」と書いている。上京した長崎から事の次第をきいた芥川龍之介は、井川恭宛書簡（二九一六・七二五付）で、「長崎君にあつて結婚問題の話をきいた。何だか長崎君の頭の不明瞭さを証拠立てるやうな話なので気の毒で追窮する気にはとてもなれなかつた。あんなでたらめに結婚する気になれたのは僕にとつては新しい驚異だ。あれで結婚琴瑟相和したら更に又一つの驚異だ。僕はこの驚異が実現されさうな気もしないではない」と書きつけることになる。

このころ幼馴染みの塚本文との結婚を真剣に考えていた芥川としては、長崎太郎の結婚のやり方が、どうにも理解できないのであつた。が、芥川が「この驚異が実現されさうな気もしないではない」と言つた通り、長崎の妻となつた大久保美和は、才色兼備の良妻であつた。右の放送原稿には続けて、「それから六十歳になるまで、妻はまことに忠実に私に仕えてくれました。私の一生はこの妻によつて助けられ、妻はひと言の不平も云わず、教育界をイゴッソウ一筋に通じた私と苦楽を共にしてくれました。私はおよそ人から褒められた覚えはありませんが、妻は誰からも褒められました。妻は従順で、慈悲のかたまりで、優しくありました」とある。彼はよき妻に恵まれたことになる。

一九一七（大正六）年七月十三日、長崎太郎は京都帝国大学法科大学政治学科を卒業した。『官報』（第一四九〇号、一九一七・七・一九）によると、政治学科（旧規程）六十四名中、順位八番の成績であつた。

父文之助は太郎の卒業を喜び、記念として和食の琴ヶ浜の保安林を購入してくれた。保安林なので伐採はできないが、「お前に遺す盆栽」と思い、行き来に眺めなさい」とのことであつた（未定稿「阿佐線に思う」）。太郎は父の配慮に心から感謝した。

卒業翌月の八月一日付で、彼は日本郵船株式会社に入社、横浜支店に勤務することになる。就職先が日本郵船とは、これまた森勝四郎との縁を思わせる。日本郵船株式会社は一八八五（明治一八）年九月設立の日本有数の大規模の船隊を持った海運会社であり、当時発展途上にあつた。第一次世界大戦の最中であつて、海運会社はどれも好況の波に乗っていたが、日本郵船はその筆頭にあつた。西回り世界一周やニューヨーク、ニュージールランド、南米東岸、欧州航路などが開設されていた。そうした有力会社への就職であつた。太郎の日本郵船就職を知つた井川恭は、すぐに祝電で祝つてくれた。また、日本郵船横浜支店宛てに、「横浜に決つたさうだね。横浜ならいゝに違ひないと、二人噂して喜んだ。尤も、大分遠いからめつたに会へなくなつたのは残念だ。適意の生活から束縛の生活に足を踏み入れた当分は、仲々辛い事と思ふ。殊に、暑さの時だからさぞやとお察しする」（一九一七・七・二八付）との一節を含む便りを出している。

すでに述べたように、長崎太郎は一高時代から教育に関心をもっていた。そのことは友人井川恭にも語っている。ちなみに井川恭が鈴かけ次郎の名で、博文館発行の雑誌『中学世界』に寄せた「理想中学の試み」には、長崎太郎が将来中学教育にあたるならこうするとの夢を、井川恭に語つたのが生かされているという（『佐々木惣一先生と私』）。太郎は大学を卒業するころも、教育界に出ることを願つ

ていた。が、彼はその前に一度、民間の会社に勤め、生きた社会の空気にふれたと思った。それが日本郵船入りとなるのであった。彼のそうした気持ちを語った文章を以下に引用する。

およそ学校の先生になるためには、その前に一度活きた社会に働いて、自分の確信を実行してみる必要がある。その上で、その考えが妥当可能でないならば、生徒に対して自信をもってそれを説くことはできないと思った。それに、一高校長の新渡戸稲造先生から、若い間に日本を出て外国から日本の姿をよく見てみることに、また、そうした上で日本と外国とを比較してみることが必要であるということも教えられた。この二つのことを目的にして、私は大学卒業後ただちに先生にならず、日本郵船会社に就職した。

（佐々木惣一先生と私）

第一次世界大戦は終わりに近づいていた。日本は当初静観していたものの、最終的には連合国側について参戦し、中国山東省の権益や赤道以北の南洋諸島を獲得することになる。この戦争は日本資本主義の大発展につながり、特に船舶会社は大儲けをすることとなる。長崎太郎の入社したところの日本郵船もその一つであり、世界屈指の船会社として発展するのであった。入社翌年、大戦の休戦条約が成ると、日本郵船の発展はとめどもないものとなる。

一九一九（大正八）年八月三十日、父文之助が東京市小石川区宮下町三十二番地の弟次郎の家で亡くなった。翌日三十一日の日記に太郎は、「父の晩年は、母を失つてからは悲惨であつた」と書く。文之助は土佐人のいごつさうの典型であり、それは太郎・次郎の血

にも流れていた。太郎はそうした血筋に思いを馳せる。

日本郵船入社後の長崎太郎は、会社の仕事に精を出すものの、面白くないことが多くあつた。日記を見ると「終日頗る不愉快」なる文字を見出す。一方で彼は、ひとり一生懸命に英語を学び、海外に出られる機会をねらつた。それは入社二年半、日本郵船のニューヨーク支店新設とともに訪れる。一九二〇（大正九）年春のことであつた。

ニューヨーク支店へ

一九二〇年二月五日、ニューヨーク支店勤務を命じられた長崎太郎は、勇躍その準備に取りかかった。前年一月十二日、長崎夫婦には長男映吉が生まれていた。映吉の名は親友恒藤恭（井川は大学院入学後結婚し、恒藤姓を名乗るようになっていた。そこで以下本論でも恒藤恭の名を用いる）の命名である。この子と妻美和を故郷の土佐に残しての単身赴任であつた。恒藤恭は前年九月、同志社大学法文学部教授に就任していた。

四月二日、長崎太郎は横浜から伏見丸という客船でアメリカへと向かった。太郎に日本の複数の新聞に寄せたアメリカ便りがあり、ご子息の長崎陽吉氏が保存されている。発表紙の確認が出来ないのは遺憾であるが、長崎太郎のアメリカ滞在当初の記録として、また第一次世界大戦後のアメリカの繁栄を記録し、それへの感想が示されている点で貴重である。以下それにより長崎太郎のアメリカでの当初の足跡を記しておこう。

横浜を出港して十日、船は一八〇度の日付変更線を越し、太平洋のアリユシャン群島の南を航海して、カナダのヴァンクーヴァー経由、四月二十一日アメリカ合衆国ワシントン州のシヤトル、そし

てタコマに着く。シャトルは森の都と呼ばれるように湖や河川が多く、常緑の樹林に包まれた清潔感あふれる都市である。すぐ南のタコマとともに、はじめて接したアメリカの都市ということで、印象に残ったようである。「シャトル・タコマは、水の景色の夢のやうに美しい町々であつた」との感想を彼は記している。翌日の二十二日、長崎太郎は、大陸横断鉄道ブルマンカーのシカゴ行き列車に乗った。シカゴまでは、三日間の汽車の旅であつた。

シカゴは五大湖の一つミシガン湖の南端に所在する。活力あふれる大都市である。水陸の交通の要所であり、高層建築の発生の地でもある。長崎太郎がシカゴに着いたのは、一九二〇（大正九）年の四月二十四日の朝であつた。シカゴでは、当時世界一といわれたデパート、マーシャルフィールドに寄り、九ドルの安全剃刀を買うのに、店の中で迷子になつて三時間ほどまごつくという失敗をしている。また巨大な屠殺場を見物、機械のように動く人間を見て感心する。シカゴからは夜行列車でエリー湖東岸のバッファローへ行く、そこで汽車を乗換え、ナイアガラの滝を見物する。ナイアガラのは、エリー湖とオンタリオ湖の間、約四十キロメートル南北に流れるナイアガラ川にかかる幅一キロメートルの大飛泉である。彼は瀑布（滝）のしぶきを浴びながら、京大時代に読んだ厨川白村の「ナイアガラを見物せざるの記」（『中央公論』一九二六・一〇）を思い出す。ちよつとおもしろい文章がアメリカ便りにあるので、引用しておく。

シカゴから汽車で一晩明かしてバッファロー迄来ると、そこで私は世界第一の名称におびき寄せられ、汽車を乗り換えてナ

イアガラを見物に出掛けた。私は厨川白村先生程気取つてもいなければ、負け惜しみも強くなかつたお陰で、世界第一の飛瀑のしぶきを浴びて一種莊嚴の感に打たれ、ホワールプールの急流に偉大なる水の景色を讚美することが出来た。「ナイアガラは平原の中にあつて幽玄の趣無し」と云つた白村先生にはホワールプールの飛沫の一滴を送つて、先生のお薬に差し上げよう。そうしたならば先生の氣宇は大きくなつて、この次にアメリカに來られたならば、決して「ナイアガラを見ざるの記」をお書きにならないだらうと思ふ。その時先生は筆を改めてこの莊嚴嚴肅畏るべき景色を叙せられることと信ずる。

四月下旬長崎太郎は、ニューヨークに安着した。日本郵船のニューヨーク支店は、マンハッタン島の最南端、N120 Broadway New York にあつた。仕事は支店開設のための準備である。支店長の勝山勝司は、京大の先輩であり、太っ腹の理解ある上司であつた。着任早々、彼はニューヨークから西南一六〇キロほどの都市フィラデルフィアへ半月ほど出張、造船事情を調べることになる。「費府より」（発表紙不明）という文章が残っている。

フィラデルフィアはアメリカ合衆国誕生の地である。独立宣言や憲法発布の舞台となつた都市であり、アメリカ合衆国最初の首都であつたという歴史の町だ。一六八一年、英国王チャールズ二世の特許状を得たウィリアム・ペンが迫害を受けていたクエーカー教徒のために、この地に殖民地を開いたのはじまる。信仰の自由が保証された町には、自由を求めて多様な殖民者が集まり、活気を呈するようになる。十七世紀末から十八世紀にかけて、フィラデルフィア

は、貿易、商業の中心として栄えた。

第一次世界大戦がはじまると、アメリカは船舶の必要を感じ、この町の郊外に、世界第一の造船場を造り上げていた。長崎太郎がフィラデルフィアの町に着いたのは、七月十八日であり、埠場人足のストライキが終わって一週間後のことであつた。何千トンもの荷物が、そのまま野天に投げ出されているのを見て、彼は国と国との争いよりも、資本家と労働者との争いが、今後いつそう激しくなるだろうとの感想を懷いている。

七月二十一日、彼は造船所を訪れる。ちょうどアメリカ船舶院の注文船が七隻、一度に進水しようとする日であつた。群衆歡呼の中に巨大船が七隻見事に進水するのを彼は見る。「アメリカはいま、その富の力の大部分を海の方に傾けている。世界一の海運国、世界の海軍国を作り上げんともがいてゐる。富みの力は万能なりや否や。そこにアメリカ人の経験せねばならぬ貴重な経験がある。そして私はアメリカ人の行くところを静かに興味をもつて見守るのである」(「費府より」)と彼は書く。

フィラデルフィアで仕事を終えた長崎太郎は、いくつかの記念物を見る。まずインディペンデンス・ホール(独立記念館)に入る。一七七六年七月四日の独立宣言、一七八七年の憲法制定会議の舞台となつたアメリカ合衆国のシンボルともいえる建物である。西隣はコンGRESS・ホールである。フィラデルフィアが連邦の首都だつた一七九〇年から一八〇〇年にかけての合衆国議事堂である。

次いでペンシルヴァニア大学の博物館を見学した。ペンシルヴァニア大学は一七四〇年にペンジャミン・フランクリンが創設した歴史のある大学である。博物館はアメリカ最大の規模を誇り、資料は

考古学関係のものが多く、また、彼は近くの墓地に眠る馬場辰猪の墓に詣でている。さらに世界一広い公園といわれるフェアマウント・パークへ行く。その中にあるペンシルヴァニア博物館では、フランス近代画家の諸作を鑑賞した。

美術館めぐりと古書の収集

アメリカでの日本郵船の仕事にも慣れた長崎太郎は、以後各地の美術館をめぐりをし、またニューヨークの古書店をせっせと漁つた。彼はもともと絵が好きだつた。一高同級の芥川龍之介・久米正雄・松岡譲・成瀬正一、それに親友恒藤恭らが、そろって絵画好きだつたことは、先にも記した。長崎太郎に先立つこと四年、アメリカに留学した成瀬正一は、学業そつちのけで、ニューヨーク市内の美術館へ通つていた。特にメトロポリタン美術館には日参するように通い、ヨーロッパの数々の名画に接したのであつた。メトロポリタン美術館は、セントラルパークの東側、五番街に面した大美術館である。コレクションは、先史時代から近代まで五千年にわたる芸術作品を収蔵している。点数も桁外れに多い。

長崎太郎は一高時代、恒藤恭に水彩画のてほどきを受けて以来、日本にいた時は、しばしば絵筆をにぎつた。残された恒藤恭宛はがきの何枚かには、水彩での風景画を添えたものがある。それだけにメトロポリタン美術館をはじめとする美術館で、西洋の多くの絵画に触れることのできるのは、うれしいことだつた。「アメリカは金持ちの国だけに、モネ、マネ、ドガ、セザンヌ、シャバンヌ、ゴーガンなどの絵を、かなり豊富に買ひ込んでゐる。それらに接することとは私にとつて嬉しいことの一つである」(「費府より」)と長崎は書

いている。また別の文章には、「アメリカではシカゴやニューヨークやボストンで、博物館や美術館を見てまはり、初めて欧州、ことにフランスの印象画に接した」(「掘り出し物」発表誌未詳)とある。後年京都市立美術大学学長として辣腕をふるうことができたのも、こうした経験あつてのことである。

ニューヨーク時代の長崎太郎は、他方、熱心な古書収集家として過ごした。彼は週末や休日、さらには病こうじてウィークデーの昼休みを利用しては、ニューヨークの古書店めぐりをするようになる。そしてウィリアム・ブレイクの版画やトマス・ビュイックの木版画、テニソンの自署のある詩集などを手に入れるまでになる。第一次世界大戦後の日本の円の為替レートは高く、まだ一介の若い会社員に過ぎなかった彼にも、何かと手を出すことができたのである。しかも、大戦後世界経済の中心は、ニューヨークに移ったとあつて、ヨーロッパからは稀覯本が流れ込んでいた。彼は昼休みの一時間を利用して、毎日地下鉄で一街一街と北に上って古本屋を漁って歩いた。やがてはマンハッタン島の本屋という本屋は、残らず知るようになる。貴重な本を掘り出すには、変わり者の本屋を探し出す必要があることも分かつてくる。

彼が当時親しくした古書店主にミスケとE・ワイエの二人がいる。ミスケはニューヨークのダウンタウン、ナッソー街十一番の赤レンガの古い建物の二階に店を持っていた。長崎の「ニューヨークのある古本屋」(『京都帝国大学新聞』一九四二・一〇・二〇)は、ミスケとその店の思い出を語ったものである。それによると、ミスケの店は四壁に古書が天井際までぎっしり積み上げられ、部屋の中央に置かれた低い棚にも両側から見えるように、古本が並べられている。ミス

ケは四角な気むずかしい顔に、黒のトルコ帽のようなものをかぶった髪もひげも白い老人である。香りのよいたばこをくわえた口元には、一癖も二癖もある相好を見せていた。彼はドイツ系ユダヤ人であつた。長崎が初めてミスケの店を訪れた時のエピソードを右の文章から引用しよう。

私の乞いに答へて、節くれ立つた大きな不細工な手で、取り出してくれたブレイクの挿絵の入った『グレイブ』の初版を示しながら「廿五ドル頂戴しやう」と云つた。「廿ドルに……」と私が云ふか云はないかに「貴方は私の今までに逢つた最上の日本人と見て特別の値段を申し上げたのに、気に入らねば直ぐ帰ってくれ」と云ひ返され、私もムツとして先のエレベーターで降りかけた。しかし、思ひ返して又店に昇つて行つて、廿五ドルでその本をもとめた。

この時、詫びを入れてブレイク本を買ったのが機縁となつて、すぐふたりは仲のよい関係となる。主人と顧客という交わりを越えての付き合いがはじまつたのだ。次の日曜日に、長崎は早くもこの一風かわつた古書店主の私邸に招かれる。ミスケの家はハドソン川の底を地下鉄でくぐつたニューヨーク対岸のニュージャージー州のウェスト・ホボケンにあつた。ナッソー街のきたない店に働き、昼は隣のレストランでわずか二つか三つのパンにバターをつけてだけの簡単な食事で済ませている老人の自宅は、こじんまりとした二階建ての家。客間にはドイツやフランスの版画の額が壁一面に掛け並べられ、卓の上には主人自ら毎日掃除をするという常用の石油ラン

プが一対置かれている。細君は若く美しいドイツ系の婦人であった。その日は一日歓待され、昼には丸煮の鳩の料理を振る舞われる。

以後長崎太郎は、昼休みの時間にはナッツソー街のミスケの店に出かけ、珍しい古書の話をむさぼり聞く。そして週末にはホボケンの私邸を訪ねて、店にも出さない稀覯本の数々を見せてもらうことになる。没後京都芸術大学に寄贈された長崎太郎の洋書コレクション、——エマソン、ホーソン、ソロー、ワーズワース、アーヴィング、ポーなどの初版本の中核をなすものは、ミスケからの情報によつて得たものであった。彼の一高時代の友、芥川龍之介も一九二二（大正一〇）年の中国旅行の際、大量の書籍を購入しているが、四年を越えるアメリカ滞在中の長崎の仕事は、日本郵船関係を除くと古書の収集と版画集めにあつたとしてよいだろう。このことは特筆に値することなのだ。